

隠岐諸島の維管束植物目録 ～過去の文献資料と島根県立三瓶自然館に収蔵されている標本情報の整理～

須貝杏子*・毛利元樹*・久保満佐子*・井上雅仁**・亀山智史*・林蘇娟*

Vascular plant list of the Oki Islands based on previous literature and specimens preserved in the Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe

Kyoko Sugai, Genki Mouri, Masako Kubo, Masahito Inoue, Tomohito Kameyama and Su-Juan Lin

要旨：島根県では、県レベルの組織的な調査等による県の植物誌・植物目録はまとめられていない。島根県が有する隠岐諸島は、島根半島の北方約50kmの日本海上に位置し、最も大きい島後と島前の3島（西ノ島・中ノ島・知夫里島）からなる。隠岐諸島の植物相は、異なる植生帯に生育する種が共存し、垂直的にも分布が圧縮されており、特徴的である。本論文では、島根県内のフロラを整理する第1段階として、過去の文献資料と島根県立三瓶自然館に収蔵されている標本情報を整理し、隠岐諸島の維管束植物目録を作成した。50の文献資料と4,440点の標本情報から1,552分類群の記録が確認された。今後、過去の標本の精査と現地での探索・標本採取を行い、目録を修正・更新していく予定である。

キーワード：維管束植物、隠岐諸島、腊葉標本、植物相、文献資料

Keywords: flora, literature, Oki Islands, specimen, vascular plant

1.はじめに

特定の地域の植物相の現状や特徴を知ることを目的として、各地でフロラ調査や植生調査が行われている。これらの調査によって作成される植物目録は、その地域の生物多様性の把握や絶滅危惧種の保全を進めていく上で最も基礎的な情報となる。島根県では、元島根大学教員の枚村喜則氏らによって精力的に植物調査が行われており、植物目録等が報告してきた（枚村1997b, 2005など）。しかしながら、県レベルの組織的な調査等による県の植物誌・植物目録はまとめられていない（枚村2002, 2013）。日本全国の各都道府県において植物誌・植物目録の編纂が行われていないのは、2002年の時点で東京都、鳥取県、島根県のみだったが（田中2002），その後東京都と鳥取県はデジタル版での植物誌の編纂に着手している（畔上2013, 坂田・

永松2016）。よって、未だ植物誌の編纂に着手できていないのは島根県のみという現状である。

島根県は本州の西部に位置し、日本海の南部に面しており、北緯37度14分～34度18分、東経133度23分～131度40分にある。また、島根半島の北方40～80kmの日本海上には隠岐諸島があり、最も大きい島が島後（隠岐の島町）と呼ばれ、島後の西南に位置する西ノ島（西ノ島町）・中ノ島（海士町）・知夫里島（知夫村）の3島は島前と呼ばれる。隠岐諸島は、中新世後期の約600万年前の火山活動によって現在の島の原型が形成された。その後、更新世半ばの約40万年前から気候変動による海面変動により、島根半島と陸続きになったり、離島になったりを繰り返してきた。約2万年前の最終氷期最寒冷期には現在よりも130m程度海面が低下しており、隠岐諸島が半島化していた最後の時代である。氷期が終わり、温暖化による海面の上昇に伴って日本列島から再び切り離され、約

* 島根大学生物資源科学部, 〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

Faculty of Life and Environmental Sciences, Shimane University, 1060 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane 690-8504, Japan

** 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

1万年前には現在のような島嶼環境になった（山内・村上1999, 隠岐ジオパーク推進協議会2012）。

隠岐諸島の現在の植物相は、暖温帯や冷温帯、亜高山帯の異なる植生帯に生育する種が共存し、垂直的にも分布が圧縮されていることが大きな特徴である（宮田・秋村1983, 秋村1994）。隠岐諸島は2013年にユネスコ世界ジオパークに認定されており、認定された理由の1つには「独自の生態系」が含まれている。そのため、隠岐諸島の植物相を把握することは社会的にも重要度が高いと言える。

そこで、本論文では島根県内のフローラを整理する第1段階として、隠岐諸島の維管束植物目録を作成することにした。過去の文献資料と島根県立三瓶自然館に収蔵されている秋村氏が採取した標本情報を整理し、過去の記録を一括してまとめた。

2. 調査方法

表1に示す1960～2019年に発表された50の文献資料を調査に用いた。各文献を確認し、隠岐諸島に分布する植物を抜き出した。隠岐諸島に関して特筆すべきこととして、過去の文献資料に「島根県内の全域に分布」と記されている場合に、隠岐諸島が含まれているのか、あるいは本州側のみの島根県を指しているのかが曖昧であることがある。そこで、「隠岐」もしくは、隠岐諸島内の具体的な地名が挙げられている場合のみ、隠岐諸島に分布する植物であると見なした。目録に載せる項目として、科・和名・別名・学名・文献情報を整理した。古い文献資料では現在の分類体系と異なる場合があったが、和名と学名はYlist（米倉・梶田2003-）に準拠し、統一した。現在と異なる和名で書かれていた場合は、別名としてその記録を残した。そして、その和名が別名としてYlistに掲載されていない場合は注釈をつけた。また、学名や和名からYlistで該当種が見つからない場合は、The Plant List (<http://www.theplantlist.org/>) を用いて、該当種を調べた。The Plant Listで検索した場合は、その旨注釈をつけた。

次に、三瓶自然館に収蔵されている腊葉標本の中から、隠岐諸島で採取されたものを抽出した。三瓶自然館では、秋村氏が1933～2007年に採取した4万点を超える標本の整理・保存が行われている（井上ら2007）。「秋村喜則氏収集植物標本目録(I)」(井上ら2009), 「秋村喜則氏収集植物標本目録(II)」(井上2014)に記載、もしくはサイエンスミュージアムネット (<http://science-net.kahaku.go.jp/>, 2019年7月22日時点), デジタル標本館 (<http://tayousei.life>.

shimane-u.ac.jp/, 2019年5月30日時点)に登録されている標本の内、隠岐諸島で採取された標本を抽出した。分類群ごとの標本の点数、標本の採取期間、標本採取場所（島）を整理した。一部の標本については、三瓶自然館において現物を確認した。

最後に、環境省のレッドリスト（環境省2017）、島根県のレッドデータブック（島根県環境生活部自然環境課2013）、隠岐のレッドデータブック（丹後2018〔未定稿〕）を確認し、各種の絶滅危惧のランクを確認した。

3. 結 果

シダ植物（ヒカゲノカズラ類・大葉シダ植物）が180分類群、種子植物（裸子植物・被子植物）が1,372分類群、合わせて1,552分類群の記録が確認され、隠岐諸島における維管束植物目録にまとめた（表2）。目録の項目は、科・和名・別名・学名・文献情報・三瓶自然館の標本の点数・標本採取期間・標本採取場所（島）・各レッドデータの絶滅危惧のランクとした。科の配列は、「新維管束植物分類表」（米倉2019）に従い、科内の配列は学名のアルファベット順とした。

秋村喜則氏収集植物標本目録(I)に記載された10,395点の内1,446点、秋村喜則氏収集植物標本目録(II)に記載された12,305点の内32点が隠岐諸島で採取されていた。また、サイエンスミュージアムネットに登録された36,655点の内4,217点、デジタル標本館に登録された41,242点の内4,197点が隠岐諸島で採取されていた。これらから重複を省き、4,440点の標本情報を集計した。4,440点の内、種名まで同定されていない13点を除くと、シダ植物は1,665点131分類群、種子植物は2,762点664分類群が採取されていた。多いものでは1分類群につき78点の標本があり（ハチジョウベニシダ）、1分類群につき20点以上の標本があるものが46分類群あった（イワヒメワラビ、オオバノイノモトソウ、マツザカシダ、コタニワタリ、ヒメワラビ、イヌワラビ、カラクサイヌワラビ、サキモリイヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ホソバシケシダ、シケシダ、ミヤマシケシダ、ホソバカナワラビ、ヤマイタチシダ、ハチジョウベニシダ、オシダ、ベニシダ、オオイタチシダ、クマワラビ、トウゴクシダ、ミヤマイタチシダ、オクマワラビ、アイアスカイノデ、イノデ、サカゲイノデ、ドウリヨウイノデ、フナコシイノデ、ネズコ、オオバクロモジ、イヌガシ、アマモ、ホソバミズヒキモ、ヤブマオ、ミズナラ、カシワコナラ、ジャヤナギ、オオタチヤナギ、ア

カイタヤ、エゾイタヤ、エゾアジサイ、ハイハマボッス、ユキグニミツバツツジ、ヤナギイボタ、マンシュウハシドイ、オオユウガギク、オニヒヨウタンボク)。標本が採取されていた分類群の内、島根県の

レッドデータブックに掲載されているものが84分類群含まれていた。一方、標本が採取されていない759分類群の内、708分類群は絶滅危惧に指定されていなかった。

表1 分布記録の確認に用いた文献資料

文献 識別記号	著者	年	タイトル	書名(編集)／雑誌名	巻・頁
a	丸山	1960	3. 植物景観 A 隠岐島、付録1. 隠岐島・島根半島・三瓶山産植物目録	国立公園候補地 隠岐島・島根半島・三瓶山(島根県・編)	33-39、130-184
b	岡本	1967	隠岐のスゲ属植物	岡山理科大学紀要	3: 27-33
c	岡	1968	隠岐の植物(一)	北陸の植物	16: 52-55
d	岡	1969	隠岐の植物(二)	北陸の植物	17: 24-25
e	岡本	1971	島根県産スゲ属植物	岡山理科大学紀要	7: 93-119
f	秋村・西上	1977	油井ノ池の浮島植生	山陰文化研究紀要	17: 1-11
g	秋村・西上	1978	隠岐島油井地区の植生	山陰文化研究紀要	18: 13-23
h	西上・秋村	1979	隠岐群島小島嶼の植生—大森島・四敷島・神島—	山陰文化研究紀要	19: 17-30
i	西上・秋村	1980	隠岐島那久地区的植生	山陰文化研究紀要	20: 9-25
j	西上・秋村	1981	隠岐島都万地区的植生	山陰文化研究紀要	21: 1-13
k	木村・丹後	1982	島前の植物目録(I) 樹木	島前の文化財	12: 75-79
l	木村・丹後	1983	島前の植物目録(II) 合弁花草本	島前の文化財	1: 55-58
m	宮田・秋村	1983	2. 島根県の植生	日本植生誌6. 中国(宮脇昭・編)	404-413
n	木村・丹後	1985	島前の植物目録(III) 離弁花草本	島前の文化財	2: 93-98
o	木村・丹後	1986	島前の植物目録(IV) 単子葉類	島前の文化財	3: 99-103
p	木村・丹後	1988	島前の植物目録(V) 羊齒植物	島前の文化財	5: 89-92
q	秋村	1994	隠岐諸島の植生と植物相: 森林植生	山陰地域研究(自然環境)	10: 25-33
r	秋村	1995	隠岐諸島の植生と植物相: 海岸植生	山陰地域研究(自然環境)	11: 17-23
s	秋村	1997	隠岐諸島の植生と植物相: シダ植物相	山陰地域研究(自然環境)	13: 33-40
t	秋村	1997	島根県のシダ植物相	ホシザキグリーン財團研究報告	1: 221-232
u	秋村	2005	島根県の種子植物相	島根県立三瓶自然館研究報告	3: 1-49
v	林・長本	2006	タイワンジュウモンジシングの新産地(分布北限地)	分類	6: 51-53
w	秋村	2006	島根県の種子植物相捕獲	島根県立三瓶自然館研究報告	4: 41-43
x	丹後	2008	隠岐諸島新産の植物(1)	島の文化財	25: 30
y	佐々木・林	2009	島根県における絶滅危惧種オニヒヨウタンボクの生育と同種の新染色体数	植物研究雑誌	84: 121-123
z	丹後	2009	隠岐諸島新産の植物(2)	島の文化財	26: 17
A	林・岩瀬	2010	A new sexual diploid of <i>Dryopteris erythrosora</i> complex (Dryopteridaceae) from Oki Islands, Japan	島根大学生物資源科学部研究報告	15: 11-13
B	丹後	2010	隠岐諸島新産の植物(3)	島の文化財	27: 59
C	丹後	2011	オキタンボボはなぜ貴重か	島の文化財	28: 1-8
D	丹後	2011	隠岐諸島新産の植物(4)	島の文化財	28: 32
E	井上ら	2012	タンボボ調査・西日本2010で確認された島根県のタンボボについて	島根県立三瓶自然館研究報告	10: 9-18
F	丹後	2012	隠岐にあるのはエゾノキケマンだった	島の文化財	29: 21-27
G	丹後	2012	隠岐諸島新産の植物(5)	島の文化財	29: 28
H	林	2013	隠岐諸島に分布するオニヒヨウタンボク—島根県準絶滅危惧種	島の文化財	30: 39-44
I	丹後	2013	稀産種コバノイクラサ <i>Urtica laetevirens</i>	島の文化財	30: 45-50
J	丹後	2013	隠岐諸島新産の植物(6)	島の文化財	30: 51
K	井上・秋村	2014	隠岐諸島油井の池の湿地植生の現状と過去30年間の変遷	島根県立三瓶自然館研究報告	12: 9-16
L	丹後	2014	ワケノカワヤナギを隠岐で発見	島の文化財	31: 48-54
M	丹後	2014	隠岐諸島新産の植物(7)	島の文化財	31: 55-56
N	井上ら	2015	隠岐諸島におけるタンボボ類の分布について—「隠岐のタンボボを調べよう」調査結果より—	島根県立三瓶自然館研究報告	13: 37-43
O	丹後	2015	本当だった隠岐のヒオウギアヤメ	島の文化財	32: 53-59
P	丹後	2015	隠岐諸島新産の植物(8)	島の文化財	32: 60-61
Q	林ら	2016	隠岐諸島におけるラン科植物の分布状況と新記録	分類	16: 159-173
R	丹後	2016	隠岐諸島新産の植物(9)	島の文化財	33: 70-71
S	丹後	2017	隠岐諸島新産の植物(10)	島の文化財	34: 49-50
T	三浦・林	2018	島根県隠岐諸島における侵略的外来生物セイタカラワダチソウ <i>Solidago altissima</i> L. の侵入状況と拡散機構の調査	島根大学生物資源科学部研究報告	23: 3-7
U	丹後	2018	シロバナヤマジソウの稀少化	島の文化財	35: 39-46
V	丹後	2018	隠岐諸島新産の植物(11)	島の文化財	35: 47-48
W	丹後	2019	オオズミという問題種	島の文化財	36: 40-45
X	丹後	2019	隠岐諸島新産の植物(12)	島の文化財	36: 46-47

バヤシャブシ、シダレヤナギ、ウルシ、ニワウルシ、ムクゲ、ミツマタ、カキノキ、チャノキ、キリ、ハコネウツギ) ;⁹、表1の文献識別記号を参照のこと;^{*}、O: 隠岐の島町、N: 西ノ島町、A: 海士町、C: 知夫村;¹¹、文献aにトウゲヒバとあり、学名からトウゲシバと判断した;²、6点の標本の内、1点はホソバトウゲシバ *Huperzia serrata* var. *serrata* と同定されていた;³、Ylistでは学名および和名で見つからなかった。The Plant Listでは、*Selaginella utchinensis* は unresolved name となっており、該当種が不明であった。原記載は小泉(1935);⁴、文献aにナカボノナワラビとあり、学名からナガホノナツノナワラビと判断した;⁵、秋村氏の文献sにはナンゴクナライシダとあったが、秋村氏が採取した標本1点はホソバナライシダと同定されていたため、本目録ではホソバナライシダとした;⁶、隠岐レッドデータブックでは、イワヘゴとイヌイワヘゴを別種に区別しており、イヌイワヘゴがCRとして掲載されていた;⁷、文献aにイタチシダとあり、学名からナンカイイタチシダと判断した;⁸、文献a, sにオシャクジデンダとあったが、これはよくある誤記と判断し、学名からオシャグジデンダと見なした;⁹、2点の標本はタクヒデシダとなっていて、学名からタクヒデンダと判断した;¹⁰、文献a, s, tにビロウドシダとあり、学名からビロードシダと判断した;¹¹、文献aにヒロハクロベとあり、本文の説明からクロベ(ネズコ)と判断した;¹²、文献aにスイレンとあり、学名からヒツジグサと判断した;¹³、クロモジとする見解とオオバクロモジとする見解に分かれていて、本目録には両者を載せたが、今後の検討が必要である;¹⁴、38点の標本の内、1点はヒメクロモジ *Lindera lancea* (Momiyama) H. Koyama と同定されていたが、花や果実を欠き、再同定は困難であった。さらに、ヒメクロモジの分布域から明らかに外れているため、本目録ではオオバクロモジに含めた;¹⁵、文献aにナワエビネとあり、学名からナツエビネと判断した;¹⁶、文献aにイチョウランとあり、イチョウランの誤記と判断した;¹⁷、全ての文献にオオバスギカズラとあり、文献rには *Asparagus rigidulus* と併記されていた。The Plant Listでは、*A. rigidulus* は *A. schoberioides* のシノニムとされていたため、キジカクシと判断した;¹⁸、文献oにマスクサスゲとあり、マスクサと判断した;¹⁹、隠岐レッドデータブックでは、ホナガヒメゴウソ *Carex phacota* var. *phacota* がCRとして掲載されていた;²⁰、文献oにカラムギ(帰化種)とあり、カラスムギの誤記と判断した;²¹、文献aにメヒジワとあり、学名からメヒシバと判断した;²²、文献aにアキメヒジワとあり、学名からアキメヒシバと判断した;²³、5点の標本の内、1点はザラツキイチゴツナギと同定されていたが、Ylistでは同種と見なされているためイチゴツナギにまとめた;²⁴、文献aにコバノネマガリザサ *Sasa ramosissima* とあり、The Plant Listでは *S. kurilensis* のシノニムとされていたため、チシマザサと判断した;²⁵、文献aにサエキザサ *Sasa praeclusa* とあり、The Plant Listでは *S. senanensis* のシノニムとされていたため、クマイザサと判断した;²⁶、文献oにムラサキエノコログサとあり、ムラサキエノコロと判断した;²⁷、文献aにダイモンジソウとその品種とされるハマダイモンジソウが併記されていたが、ダイモンジソウにまとめた;²⁸、文献aにウマゲヌスピトハギとあり、学名からヌスピトハギと判断した;²⁹、文献aにマルバヌスピトハギとあり、学名からマルバヌスピトハギと判断した;³⁰、文献kにヤマザクラとその種内分類群のウスケヤマザクラが併記されていたが、Ylistでは同種と見なされているためヤマザクラにまとめた;³¹、文献a, kにカマツカとワタゲカマツカが併記されていたが、Ylistでは同種と見なされているためカマツカにまとめた。10点の標本の内、6点はワタゲカマツカと同定されていたが、カマツカと同定されていた他4点の標本との明確な違いは見出せなかった;³²、ミヤマフユイチゴと同定された標本が1点あったが、茎に毛がありフユイチゴと思われた。隠岐レッドデータブックには、フユイチゴの中間型は見かけるが、確実にミヤマフユイチゴと同定できていないとあり、今後の検討が必要である;³³、文献aにナガバノモミジイチゴとあり、学名からナガバモミジイチゴと判断した;³⁴、ナナカマドとする見解とツシマナナカマドとする見解に分かれていて、本目録には両者を載せたが、今後の検討が必要である;³⁵、文献aにシモツケの変種とされるヒロハシモツケが挙げられていたが、学名からシモツケに統合した;³⁶、20点の標本の内、7点はカタバヤブマオと同定されていたが、Ylistでは同種と見なされているためヤブマオにまとめた;³⁷、文献aにナガバカワヤナギとあり、学名からカワヤナギと判断した;³⁸、文献g, jにエンコウイタヤとあり、エンコウカエデと判断した;³⁹、文献aはヒナノハウチワとあり、ヒナウチワカエデと判断した;⁴⁰、文献aにキワダとあり、学名からキハダと判断した;⁴¹、文献aにツバメウツギ *Deutzia hebecarpa* とあり、The Plant Listで *D. crenata* のシノニムとされていたため、ウツギと判断した;⁴²、11点の標本の内、2点はケバイカウツギ、2点はアイコバイカウツギと同定されていたが、Ylistでは同種と見なされているためニッコウバイカウツギにまとめた;⁴³、文献g, hにイボタとあり、イボタノキと判断した;⁴⁴、ハシドイとする見解とマンシュウハシトイとする見解に分かれていて、本目録には両者を載せた。しかし、ハシトイと同定されていた6点の標本とマンシュウハシトイと同定されていた21点の標本との間で明確な違いは見出せなかつたため、今後の検討が必要である;⁴⁵、文献aにタチイヌフグリとあり、学名からタチイヌノフグリと判断した;⁴⁶、文献aにオオイヌフグリとあり、学名からオオイヌノフグリと判断した;⁴⁷、文献aにイヌフグリとあり、学名からイヌノフグリと判断した;⁴⁸、隠岐レッドデータブックでは、エダウチズメノトウガラシがNTとして掲載されていた;⁴⁹、文献aにキツネマゴとあり、学名からキツネノマゴと判断した;⁵⁰、文献aにツリガネニンジンの他に、その品種とされるハマシャジン、ナガバシャジンが併記されていたが、学名からツリガネニンジンにまとめた;⁵¹、文献aにオトコヨモギとの品種とされるキレハノオトコヨモギが併記されていたが、学名からオトコヨモギにまとめた;⁵²、文献aにシロヨメナとの品種とされるムラサキシロヨメナが併記されていたが、学名からシロヨメナにまとめた;⁵³、19点の標本はオキノアブラギクと同定されていたが、Ylistではシマカンギクの別名と見なされているためシマカンギクとして載せた;⁵⁴、文献g, h, i, jにオキノアブラギクとあり、オキノアブラギク(シマカンギク)と判断した;⁵⁵、13点の標本の内、10点はオオバアザミと同定されていたが、Ylistでは同種と見なされているためヨシノアザミにまとめた;⁵⁶、文献aにハハキギクとあり、学名からホウキギクと判断した;⁵⁷、文献aにオオウコギとあり、学名からケヤマウコギと判断した;⁵⁸、文献aにヒメチドメグサとあり、学名からヒメチドメと判断した。

4. 考 察

本論文では1,552分類群の記録を確認し、著者や文献によって見解が分かれているものがあったが、本目録ではその両者を載せた(クロモジとオオバクロモジ、ハシトイとマンシュウハシトイ、ナナカマドとツシマナナカマド、イタヤカエデ類など)。また、標本には、

種内分類群まで同定されているものと種レベルまでの同定にとどまるものとがあった(トウゲシバ、チヂミザサ、イタヤカエデ、ヒヨドリバナなど)。それから、栽培逸出や植栽など、明らかに自生ではない23分類群は目録から除外したが、特に草本植物については、自生であるのか、外来であるのかを検討できていない。これらの点については、今後の検討が必要である。

植物の分布情報を明らかにする上で植物標本の存在は重要な証拠となる。今後、本目録で文献情報のみで分布が確認され、標本が作製されていない種について、改めて現地での探索と標本の採取を行っていくことが望ましい。また、すでに標本が採取されている種に関しても、過去に採取された場所に現在も分布があるのかを確認することも重要である。新たに作製した標本は三瓶自然館に収めて、それと同時にこれまでに採集された標本の精査や他の研究機関に収蔵されている標本情報の整理も行い、隱岐諸島における維管束植物目録を修正・更新していく予定である。

謝 辞

デジタル標本館の非公開データを提供して下さった島根大学の秋廣高志博士に感謝いたします。本研究は、JSPS 科研費 (18K05727) と 2019 年度 隱岐ユネスコ世界ジオパーク学術研究奨励事業の助成を受けて行われました。

引 用 文 献

- 畔上能力 (2013) 各都道府県別の植物自然史研究の現状、13 東京追補、植物地理・分類研究、60: 14
- デジタル標本館 <http://tayousei.iife.shimane-u.ac.jp/> (2019年8月1日参照)
- 井上雅仁、松村美雪、野上篤孝 (2007) 枝村喜則氏収集さく葉標本の整理について、島根県立三瓶自然館研究報告、5: 13-14
- 井上雅仁、松村美雪、野上篤鷹 (2009) 枝村喜則氏収集植物標本目録(I)、島根県立三瓶自然館収蔵資料目録、11: 1-173
- 井上雅仁・松村美雪・中西正実・柳浦正夫 (2012) タンポポ調査・西日本2010で確認された島根県のタンポポについて、島根県立三瓶自然館研究報告、10: 9-18
- 井上雅仁 (2014) 枝村喜則氏収集植物標本目録(II)、島根県立三瓶自然館収蔵資料目録、12: 1-207
- 井上雅仁、枝村喜則 (2014) 隱岐諸島油井の池の湿地植生の現状と過去30年間の変遷、島根県立三瓶自然館研究報告、12: 9-16
- 井上雅仁、三島秀夫、深谷治、八幡浩二、野辺一寛 (2015) 隱岐諸島におけるタンポポ類の分布について—「隠岐のタンポポを調べよう」調査結果より—、島根県立三瓶自然館研究報告、13: 37-43
- 環境省 (2017) 環境省レッドリスト 2017 維管束植物、<https://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf> (2019年8月1日参照)
- 木村康信、丹後亜興 (1982) 島前の植物目録(I) 樹木、島前の文化財、12: 75-79
- 木村康信、丹後亜興 (1983) 島前の植物目録(II) 合弁花草本、隠岐の文化財、1: 55-58
- 木村康信、丹後亜興 (1985) 島前の植物目録(III) 離弁花草本、隠岐の文化財、2: 93-98
- 木村康信、丹後亜興 (1986) 島前の植物目録(IV) 単子葉類、隠岐の文化財、3: 99-103
- 木村康信、丹後亜興 (1988) 島前の植物目録(V) 羊齒植物、隠岐の文化財、5: 89-92
- 小泉源一 (1935) 日本産捲柏属、Acta Phytotaxonomica et Geobotanica, 4: 220-230
- 林蘇娟 (2013) 隱岐諸島に分布するオニヒヨウタンボク—島根県準絶滅危惧種、隠岐の文化財、30: 39-44
- Lin Su-Juan and Iwatsuki Kunio (2010) A new sexual diploid of *Dryopteris erythrosora* complex (Dryopteridaceae) from Oki Islands, Japan, 島根大生物資源科学部研究報告、15: 11-13
- 林蘇娟、長本三鈴 (2006) タイワンジュウモンジシダに新产地(分布北限地), 分類、6: 51-53
- 林蘇娟、大津浩三、井上雅仁 (2016) 隱岐諸島におけるラン科植物の分布状況と新記録、分類、16: 159-173
- 丸山巖 (1960) 3. 植物景観 A 隱岐島、国立公園候補地 隱岐島・島根半島・三瓶山 (島根県・編), p33-39
- 丸山巖 (1960) 付録1. 隱岐島・島根半島・三瓶山産植物目録、国立公園候補地 隱岐島・島根半島・三瓶山 (島根県・編), p130-184
- 三浦壯太、林蘇娟 (2018) 島根県隠岐諸島における侵略的外来生物セイタカアワダチソウ *Solidago altissima* L. の侵入状況と拡散機構の調査、島根大生物資源科学部研究報告、23: 3-7
- 宮田逸夫、枝村喜則 (1983) 2. 島根県の植生、日本植生誌6. 中国(宮脇昭・編), 404-413
- 西上一義、枝村喜則 (1979) 隱岐群島小島嶼の植生一大森島・西敷島・神島一、山陰文化研究紀要、19: 17-30
- 西上一義、枝村喜則 (1980) 隱岐島那久地区の植生、山陰文化研究紀要、20: 9-25
- 西上一義、枝村喜則 (1981) 隱岐島都万地区の植生、山陰文化研究紀要、21: 1-13
- 岡国夫 (1968) 隱岐の植物(一)、北陸の植物、16: 52-55
- 岡国夫 (1969) 隱岐の植物(二)、北陸の植物、17: 24-25
- 岡本香 (1967) 隱岐のスゲ属植物、岡山理科大学紀要、3: 27-33
- 岡本香 (1971) 島根県産スゲ属植物、岡山理科大学紀要、7: 93-119
- 隠岐ジオパーク推進協議会 (2012) 隱岐ジオパークガイドブック、183pp、隠岐ジオパーク推進協議会、島根
- 坂田成孝、永松大 (2016) web 版鳥取県植物誌、<http://floratottori-trialsseesa.net/article/355078015.html> (2019年8月1日参照)
- 佐々木博美、林蘇娟 (2009) 島根県における絶滅危惧種オニヒヨウタンボクの生育と同種の新染色体数、植物研究雑誌、84: 121-123

- サイエンスミュージアムネット <http://science-net.kahaku.go.jp/>
(2019年8月1日参照)
- 島根県環境生活部自然環境課 (2013) 改訂しまねレッドデータブック2013植物編, 254pp, 公益財團法人しまね自然と環境財團, 島根
- 萩村喜則, 西上一義 (1977) 油井ノ池の浮島植物, 山陰文化研究紀要, 17: 1-11
- 萩村喜則, 西上一義 (1978) 隠岐島油井地区の植生, 山陰文化研究紀要, 18: 13-23
- 萩村喜則 (1994) 隠岐諸島の植生と植物相: 森林植生, 山陰地域研究(自然環境), 10: 25-33
- 萩村喜則 (1995) 隠岐諸島の植生と植物相: 海岸植生, 山陰地域研究(自然環境), 11: 17-23
- 萩村喜則 (1997a) 隠岐諸島の植生と植物相: シダ植物相, 山陰地域研究(自然環境), 13: 33-40
- 萩村喜則 (1997b) 島根県のシダ植物相, ホシザキグリーン財団研究報告, 1: 221-232
- 萩村喜則 (2002) 各都道府県別の植物自然史研究の現状, 32島根県, 植物地理・分類研究, 50: 220
- 萩村喜則 (2005) 島根県の種子植物相, 島根県立三瓶自然館研究報告, 3: 1-49
- 萩村喜則 (2006) 島根県の種子植物相補遺, 島根県立三瓶自然館研究報告, 4: 41-43
- 萩村喜則 (2013) 各都道府県別の植物自然史研究の現状, 32島根県追補, 植物地理・分類研究, 60: 33
- 田中政司 (2002) 各都道府県別の植物自然史研究の現状, 都道府県別植物誌・植物目録編纂状況一覧, 植物地理・分類研究, 50: 255-256
- 丹後亜興 (2008) 隠岐諸島新産の植物 (1), 隠岐の文化財, 25: 30
- 丹後亜興 (2009) 隠岐諸島新産の植物 (2), 隠岐の文化財, 26: 17
- 丹後亜興 (2010) 隠岐諸島新産の植物 (3), 隠岐の文化財, 27: 59
- 丹後亜興 (2011a) オキタンボボはなぜ貴重か, 隠岐の文化財, 28: 1-8
- 丹後亜興 (2011b) 隠岐諸島新産の植物 (4), 隠岐の文化財, 28: 32
- 丹後亜興 (2012a) 隠岐にあるのはエゾノキケマンだった, 隠岐の文化財, 29: 21-27
- 丹後亜興 (2012b) 隠岐諸島新産の植物 (5), 隠岐の文化財, 29: 28
- 丹後亜興 (2013a) 稀産種コバノイラクサ *Urtica laetevirens*, 隠岐の文化財, 30: 45-50
- 丹後亜興 (2013b) 隠岐諸島新産の植物 (6), 隠岐の文化財, 30: 51
- 丹後亜興 (2014a) ワケノカワヤナギを隠岐で発見, 隠岐の文化財, 31: 48-54
- 丹後亜興 (2014b) 隠岐諸島新産の植物 (7), 隠岐の文化財, 31: 55-56
- 丹後亜興 (2015a) 本当だった隠岐のヒオウギアヤメ, 隠岐の文化財, 32: 53-59
- 丹後亜興 (2015b) 隠岐諸島新産の植物 (8), 隠岐の文化財, 32: 60-61
- 丹後亜興 (2016) 隠岐諸島新産の植物 (9), 隠岐の文化財, 33: 70-71
- 丹後亜興 (2017) 隠岐諸島新産の植物 (10), 隠岐の文化財, 34: 49-50
- 丹後亜興 (2018a) シロバナヤマジソの稀さ加減, 隠岐の文化財, 35: 39-46
- 丹後亜興 (2018b) 隠岐諸島新産の植物 (11), 隠岐の文化財, 35: 47-48
- 丹後亜興 (2018) 隠岐版レッドデータブック2018 維管束植物, <http://file.blog.fc2.com/okiflora/OkiRDB.pdf> (2019年11月24日参照)
- 丹後亜興 (2019a) オオズミという問題種, 隠岐の文化財, 36: 40-45
- 丹後亜興 (2019b) 隠岐諸島新産の植物 (12), 隠岐の文化財, 36: 46-47
- The Plant List <http://www.theplantlist.org/> (2019年8月1日参照)
- 山内靖喜, 村上久 (1999) 隠岐群島の生い立ちと古地理の変遷, 隠岐の文化財, 16: 1-10
- 米倉浩司, 梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名-学名インデックス」 (YList), <http://ylist.info/> (2019年8月1日参照)
- 米倉浩司 (2019) 新維管束植物分類表, 358pp, 北隆館, 東京